

## カンボジア支援にむけ調査団派遣

3月19日から3月27日にかけてカンボジア国において保健案件形成調査を実施した。昨年末、香川県に本部を置くNPO法人セカンドハンドからTICOへ保健案件への支援依頼が寄せられた。セカンドハンドはカンボジアへの学校建設支援を13年継続実施。3年前からは診療所の建設も支援したが、運営面での支援が必要との判断から、保健医療分野での支援をTICOと共同で実施する運びとなった。

今回調査の対象となったのは首都プノンペン市西部地域で、対象人口は約30万人。プノンペン市の経済発展の傍ら、貧困層の住民が強制移動を強いられており、その多くが西部地区へ流入している現状があり、上下水道



数時間の雨で大洪水のスラム

の整備もない地区での生活を強いられている。その様な状況下で妊産婦の死亡が大きな課題として挙げられている。さまざまな理由から診療所

で分娩する人が少なく、また、分娩中に異常が発生したときの患者搬送システムが確立していないためである。TICOは今後、ザンビアでの経験を生かし、プノン

ペン市西部保健管区局の職員とともに、「安全なお産」ができるシステムの構築支援を実施していく予定である。(K.I)

ソーチャット西部保健局長(中央)と診療所視察



セカンドハンド事務所にて首脳会談議  
[右:セカンドハンド新田代表]



### [TICOへの入会方法]

会員となって資金面からTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。入会ご希望の方は郵便振替用紙に所定の年会費を納入して下さい。インターネットのTICOホームページからも入会申し込みが可能です。会員の方にはTICOニュースレター『Face to Face』を毎号送付いたします。

【正会員】 12,000円

【賛助会員】 個人: 12,000円 学生: 6,000円  
団体: 15,000円

(通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい)

**振込先: 郵便振替口座 01640-6-37649**

**振込先加入者名: TICO**

Eメールアドレスをお知らせいただいた方にはTICOの各種イベント情報をメールにてご連絡申し上げます。

TICOの活動は皆様からの会費やご寄付によって支えられています。会費の納入がお済みでない会員の方は、納入下さいようお願いします。なお、郵便口座からの「年会費自動引き落とし」もご利用いただけます。

### ありがとうございました(敬称略)

#### ★寄付をくださった方々★

佐藤慶子 カリタス女子中学高等学校 吉田修  
さくら診療所玄関募金箱 五十嵐仁 戸井 渡部豪  
聖ヤコブ教会 西尾正己 田淵幸男 小林勉  
入交秋子 井形和枝 福士庸二 田淵千夏  
五十嵐久美子 菅原祥恵 小川英美香 饗場和彦  
アントハウス 山本秀樹 森山小学校児童会  
ジャスコ徳島店 篠原弘子 橋本綾子

栗本美加 住友和子 新野高校内 田上裕之他有志  
**★会費を継続して払ってくださった方々★**

石井やよい 岩田祥三 金納千晴 黒田浩 松島拓  
四宮万代 白石勝美・久代 砂田 高瀬房子  
田中純子 坂東正章 古川久美子 真子多恵  
矢野祖 山元博子 小桧山希

#### ★新たに会員になってくださった方々★

田淵幸男 田淵規子 森山庄八 山田絵美  
森本一 関野聰美 庄野真代 池田翔子 鉄谷佳代  
下横佳代 浦出華 鈴木葉子 穂岐山藍  
(以上は2006年12月19日から3月31日までの事務局入金分: 順不同)

### 募金のお願い TICOのザンビア支援活動は皆様からの寄付金や会費により支えられています

(事務局の作業軽減のため領収書は発行していません。必要な方はお申し出下さい)

**郵便振替口座: 01640-6-37649 振込先加入者名: TICO**

**四国銀行 山川支店 (店番号344) 普通預金 0199692**

**特定非営利活動法人TICO 代表理事 吉田修 (トクヒ テイコ)**



# Face to Face

NO.12

特定非営利活動法人TICO

## TICOユースが正式発足いたしました!!



元気いっぱいTICOユースメンバー



TICO吉田代表から承認証を受け取るTICOユース庄野代表

TICOユースの活動に興味のある方は是非ご連絡ください。

メールアドレス: [tico\\_youth@yahoo.co.jp](mailto:tico_youth@yahoo.co.jp) 電話 090-7572-3532(庄野の携帯)

### ユース活動報告①

3月末日、山川町の山崎忌部神社にて、NPO法人げんき山川ネットワークさん主催の「子供と作る・竹細工講座」が開催された。地元の子供たちやおじいさん、そしてユースメンバーなど総勢20名以上が参加し、竹を通して互いに交流を図った。ユースの「マイ箸」企画の第一弾でもある本講座、みな使い馴れぬノコギリやなたを手に、竹箸つくりに大奮闘。竹を割り、それを彫刻刀で1本の箸の形に整えてゆく。自分の箸が完成したときのあの感動は今でも忘れられない。先人の指導を受けてながらの作業を通して、われわれは「ものづくり」の暖かさに触れた気がしたのであった。(M.S)



#### TICOユース活動報告

1. 3	トピック	9
2		10-12
4-5		13
6-8		14

#### トピック

1. 3	トピック	9
2		10-12
4-5		13
6-8		14

#### トピック

ティコ  
TICOは保健・医療・農村開発などの分野を中心にアフリカ・ザンビア共和国で支援活動を行っているNGO(非政府組織)です。世界の中の日本を考え、それそれが自分にできる国際協力を実践していくために1993年に任意団体として設立、2004年9月に特定非営利活動法人(NPO法人)となり活動を続けています。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々と分かち合い、私たちの生活を振り返るとともに地域の精神文化の高揚に寄与することを目的としています。

## 狂気の世界

### アメリカ主導のグローバリゼーションが人々を幸福にするか?

TICO代表 吉田 修

グローバリゼーションとは、どうやら企業が国境を超えて好き勝手に活動し利益を上げるために、邪魔になる規制を撤廃するということらしい。その結果、巨大企業は大増益ですが、貧しい国の人々、戦場となった国の人々、それに一般的なアメリカ人や日本人も大変不幸になったのではないでしょうか。

#### 1) 国家をしのぐ巨大な力を持った多国籍企業

多国籍企業上位5社のそれぞれの年間売り上げは、後発途上国49カ国のGDPの合計より大きい。

ビル・ゲイツの資産は、人口6億人を抱える後発途上国49カ国のGDPの合計より大きい。

#### 2) 圧倒的な軍事力の国アメリカ、その借金を穴埋めする日本

今年度のアメリカ合衆国国防費56.8兆円、それとは別に対テロ費16.7兆円（国家の最もおろかな行為、戦争のためにこれだけのお金を使っている。平和のために使えば貧困撲滅、エイズ対策、環境保全などすべて解決できる）

日本がアメリカの国債を買い支えた額、約30兆円（我々の年金や郵便貯金です）

イラク戦争の結果、イラクの一般市民が60万人死亡、石油業界は史上最高の収益

#### 3) 進まない地球温暖化対策、特にアメリカと日本

京都議定書を批准しないアメリカ

京都議定書を守る気がない日本（目標ー6%、実際は+8%）

こんな歪んだ世界で人類が平和に幸福に暮らせるはずがありません。最初からハンディーのある競争、富の集中と極貧、資源の枯渇と環境破壊、そして資源争奪戦争が、テロを作り出しています。

競争より共生、戦争より対話、格差より公正な分配、大量消費より持続可能な経済、投機より未来のための投資、一極集中より地域分散、グローバリゼーションより地域循環型社会を目指すべきではないでしょうか。もう一つの世界は可能です。



吉田 修(よしだ おさむ)  
自称兼業農家(外科医)  
1958年徳島県生まれ  
アフリカをはじめ世界各国にて国際医療援助活動を実施。現在、徳島県山川町の「さくら診療所」で地域医療を実践しながら、代表として「TICO」を運営している。

## 平成19年度TICO通常総会開催のお知らせ

下記の通り、平成19年度TICO通常総会を開催致します。会員の皆様は是非ご参加下さい。正会員の皆様には別途ご案内を申し上げますので出欠のご連絡を頂けますようよろしくお願い申し上げます。（なお、正会員の方で総会に欠席される場合は委任状の提出をお願いいたします。）

記

日時：平成19年5月13日（日）

13:00-14:00

場所：吉野川市アメニティセンター・視聴覚室

総会終了後引き続き14:00から

地球人カレッジを開催致します。

詳細は12ページを参照してください。

## 地球人カレッジの報告

地球人カレッジは「地球規模で考えながら地域から活動していく」をテーマに毎月1回行っている公開セミナーです。TICO活動の一環として1997年9月から始まりました。

**January** コンゴ民主共和国に平和は来るのか－06年の選挙を監視して－  
饗場 和彦さん（徳島大学総合科学部助教授）

ボスニア、東ティモール、パレスチナをはじめこれまで15回、紛争地における選挙支援活動に携わってきた氏が、2006年に実施されたコンゴ民主共和国における選挙監視に関わられたご経験を紹介していただきました。青空投票所やギネスの対象になるほど大きな投票用紙、再投票を予防するために指にインクをつける方法など、日本では考えられないような場面が照会されました。そのような状況の中、多くの人が選挙の準備に関わる様子や、行列を作り選挙に参加する老若男女の姿からコンゴの明日を感じることができました。今回の選挙はコンゴにとって平和への第一歩となるとともに、アフリカの他の国にとっても勇気付けられた出来事であったと思います。



**February** 國際協力というお仕事とは？ 鈴木葉子さん  
(特定非営利活動法人HANDS・プログラムオフィサー)



海外留学や国連機関を通じてアフリカの国々での勤務を経験され鈴木さんが、現在NGOの職員として勤務されている経験から、国際協力機関で就職する方法を語っていただきました。「国連」で働きたいという憧れを持つだけでは勤まらない現実と、「どこに就職するのかではなく、何がしたいのかを明確にすることを忘れないで」との言葉が印象的でした。また、現在鈴木さんが所属されているNGO



「HANDS」（本部・東京都）が実施している事業の紹介や、NGOが抱える課題について共有してくださいました。いかに人材と資金を確保するかということはNGOの命題のようです・・・。

**March**

徳島での防災研修を終えて～一人でも多くの命を救うための新たな挑戦  
ルイス・カチョファ氏

（ザンビア国警察庁地域警察救急救助隊・隊長）

徳島県の支援を受け昨年10月より徳島にて防災について学んでいた研修生・カチョファ氏が研修報告と今後の抱負について熱く語って下さいました。徳島大学防災センターの先生方のご指導の下、吉野川警察や消防署のご協力もあり充実した6ヶ月間であったことが100以上の写真を使って報告されました。「ザンビアは経済的にもまだ発展途上の国ですが、お金をかけずに実施する防災の一番有効な方法が防災教育であることを学びました。ザンビアでも取り入れたい。」と抱負が語られました。また、会場からの日本に来て気に入ったところは？という質問に「鍋」と答えたカチョファ氏。理由は「ひとつの鍋をみんなで食べるという習慣はザンビアにはない。鍋と一緒に食べることによってひとつになる」との事。十分に日本人の心を掴んだようです。氏はTICOが支援をしている救急事業を支えている人材。今後の活躍に期待したいと思います。



防災センターの先生方と一緒に防災ダンスを紹介



報告会に参加してくださった方々と。  
有難うございました。

## どうしてまた徳島県なのか？

—TICO合宿に参加して—

大阪大学医学部4年 森田 雅也

どうしてまた徳島県なのか？ 私が国際保健協力を志す1人の学生として、徳島県にあるNGOがザンビアで国際協力していると聞いたときの素直な疑問でした。そして、そのNGOが診療所と両立(並立)して活動していると聞いたとき、その驚きは倍増するとともに是非とも徳島県に行って自分の眼で見たいという思いに駆られました。なぜなら、それは国際保健を志す学生にとって1つの理想の形と思えたからです。

JICAで働くなど一部の人を除き、多くの人は国際協力へ関わるために、一旦国内での職を辞して、自らの退路を断った状態で携わるというものがこれまで一般的だったように思います。この決断には、非常に勇気が必要です。そしてこのことが私たち国際保健を将来の活動

TICO農園で収穫した食材。

新鮮さに感激！



と年末の忙しい時期にも関わらず合宿をさせて頂くことになりました。

実際の合宿は、2日間行い、スケジュールも全てTICOのスタッフの方にお願いしたのですが、その内容の濃さには圧倒されました。個々の内容を挙げればきりが無いので割愛しますが、私が最も知りたかったTICOとさくら診療所の両立についてや、ザンビアでの活動報告、ワークショップ、TICOの今後の方向性など実際に様々なことを教えていただきました。さらに個々のプログラムだけではなく、個々のスタッフの方の実際の経験談なども聞け、自分の将来を考える上でたいへん有意義でした。生き方まで個性的で実に魅力的なスタッフの方ばかりで楽しかったです。

日本の地方都市で地域医療を担うスタッフ40名前後の診療所が遠くアフリカのザンビアと繋がっている。誰も想像しないような繋がり。だけど、ノンフィクション。

日本で問題になってきている地域医療と国際協力のコラボレーション、そこに非常に大きな可能性を感じた2日間でした。



### INFORMATION

#### ヒダノ修一 and 新田昌弘 コンサート (和太鼓奏者) (津軽三味線奏者)

2000年からザンビア支援のためチャティーコンサートを開催して下さっているヒダノ氏のコンサートが今年も開催されます。

7月14日(土) 14:00—  
徳島大学薬学部長井記念ホールにて  
学生対象 2,000円

② 7月15日(日) 14:00—  
吉野川市鴨島公民館  
前売3,000円/当日3,500円

コンサートの詳細情報やチケットのお求めはTICO事務局までお問い合わせください。（担当：五十嵐 090-7786-3193）



#### 次回の地球人カレッジのご案内

4月28日(土) 19:00—20:30

場所：吉野川市アメニティーホール

(電話：0883-42-6611)

テーマ 「TICOが人を“地球人”と呼ぶ理由」

3月にザンビアにおいて人々の健康に関する調査を行った大学生5名が、現場での体験を通して見て、感じ、学んだ事を報告します。

5月13日(日) 14:00—15:30

場所：吉野川市アメニティーホール

(電話：0883-42-6611)

テーマ 「新自由主義が作る援助の光と影  
—感染症やダム開発を中心に—」

講師 黒岩 宙司さん

(東京大学国際保健計画学教室、助教授)  
5月は地球人カレッジの前に会員総会を開催します。詳細は2ページを参照。

6月は兵庫県に在住するベトナム難民の青年を迎え、ラップにのせて平和のメッセージを伝える活動について語っていただく予定です。

詳細は決まり次第ホームページで公開します。

## 「足元から国際協力」を再確認した2日間でした。—ユース合宿に参加して—

2月11、12日に、TICOのバックアップの元、いました。また、合宿を行うにあたって、各自が事前ユース合宿を行いました。今回の合宿の主な目的は、開発教育についての理解を深めること、そしてTICOユースのこれからの活動について具体的に話し合うことでした。

開発教育についての理解を深めるにあたって、最初に貿易ゲームを行いました。各国(各グループ)が、自国の資源(紙)や技術(はさみなど)を用い、利益を上げるべく製品の生産や貿易に奮闘。資源も技術も持ち合せている国、資源はあるが技術はない国、技術も資源も乏しい国など、様々な国との間で行われる貿易の様子は、まさに現実の世界で行われている貿易の縮図であり、ゲーム後の振り返りでは、各自が感じたこと、気づいたことなどを発表し合



いました。自分たちで開発教育の定義や歴史、ねらいなどを調べ発表しあったことでより理解が深りました。これからも継続して開発教育の勉強を進めていき、そのまとめとしてユースオリジナルの開発教育ツールを作成しようと考えています。

また、TICOユースについての話し合いでは、今期のユースの活動テーマを決定したり、今後のスケジュールを立て、内容をつめたりしました。決まった活動テーマは「食と環境」。今後、このテーマの下に活動を進め、その成果を開発教育のツール作成に反映できたらと考えています。

この合宿で見えてきた目標を胸に、現在TICOユースは、4月19日(木)に行われる設立記念総会の準備や、5月に催される徳島大学の学祭での出店準備として、藍染の箸袋作成などを行っています。これからも、「足元から国際協力を！」をモットーにパワフルに活動していきたいと思います。(S.I.)

## TICOユースは伝統芸術を大切にします。藍染め箸袋を作っちゃいました！

3月27日の竹箸作りに引き続き、28日、29日は酒井景子先生の指導の下、エルサルバドル藍を用いた藍染め箸袋作りを行いました。二日目は、作業だけでなく『藍というツールから、国際社会における生産販売の現状を見る』という題目で、以前青年海外協力隊でエルサルバドルに派遣されていた景子さんからレクチャーを受け勉強しました。

景子さんは、大学時代に『藍』について勉強され、その後、エルサルバドルでは「藍コーディネーター」として派遣され、現地では藍製品の生産から販売までにいたる過程をサポートされたそうです。レクチャーでは、日本の藍とエルサルバドルの藍の違いや、エルサルバドルの中での人々の階級の違いとその境遇などを非常にわかりやすく説明してくださいました。話の中で、景子さんはいろいろなことを「知る」ということの重要性を教えてくださいました。



藍染の箸袋づくりは、それはもう！楽しい！の一言でした。

ユースのメンバーや景子さんの友人など、たくさん的人が集って作業をしたため、できる模様も十人十色。エル

サルバドル藍は日本藍に比べて非常に簡単にできて、日本藍と同じようにきれいな藍色をしていました。染色する回数を変えて藍色の濃さを変えたり、模様の作り方を色々工夫してみたり、と飽きることはありませんでした。染色する

回数を変えて藍色の濃さを変えたり、

模様の作り方を色々工夫してみたり、

と飽きることはありませんでした。染色する

回数を終えて布を広げたときの感動はたまりませんでした！

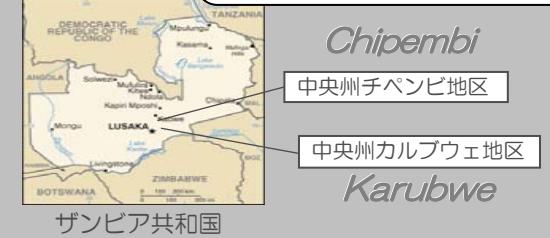
今回自分で箸と箸袋を作り、決して上出来なものはできませんでしたが、完成品には愛着がわき、温かみを感じました。ずっと長く使いたいな、と思いました。私は、この体験を通じて、「もの」を長く大事に使うことの大切さと、「ものづくり」の温かさを再確認することができました。(H.U.)

# WAHE プロジェクト通信

## WAHE(ワヘ)とは?

Water(水)、Agriculture(農業)、Health(健康)、Education(教育)の領域をカバーしながら農村の生活水準向上を狙うTICOのプロジェクト。TICOは2002年ザンビア南部州にて飢餓緊急援助を行なったがそこで得た教訓とは「緊急援助の限界」と「飢餓をなくす為には農村に根本的対策が必要」との認識だった。いくつかの候補地から安全性や信頼できるパートナーの存在等の観点から支援地域をチベンビとカルブ

TICO ザンビア事務所 西口三千恵



## 雨が降った!

雨期に入ったチベンビは、当初理想的な雨の降り方だ!と地元の人たちは喜んでいました。確かに、一面栽培されているメイズは青々として、今年も豊作かと心の中で期待したものです。ところが2月にはいると状況は一変、雨が降りやまなくなりました。連日の雨・雨・雨で土壤の肥料はすっかり洗い流され、作物は黄色く変色し始めました。降らなくても問題ですが、降りすぎるのもまた深刻な問題です・・・。それに加えて降り続く雨は道路をスポンジのように柔らかくし、我々の移動にも支障をきたし始めました。車がわだちにはまり、抜け出せなくなるのです。日本で暮らす皆さんには、少し想像がつかないかもしれません、スタッツと呼ばれるこの状態に陥ると、最悪の場合、トラクターの手助けなしには車を救出できなくなります。我々の一行も、この状況に陥ってしまいました。一度目はなんとか牛2頭と20名ほどの人力で脱出。しかしその2週あとに再度スタッツしたときは、6時間立ち往生の末、近隣で唯一のトラクターに救出されました。



車がスタッツ!学校帰りの子供たちと牛たちに助けられました。

## 地道な活動に励まされるTICO自慢の

### 小規模ローンプロジェクト

小規模ローンは、今現在カサカ・グループのみとなっています。昨年開始したタックショップ(雑貨屋さん)が好況で、売り上げもうなぎ登りの状態でしたが、雨期に入って客数が急激に減少しました。雨期は



売り上げについて協議する農業省職員  
とカサカグループメンバー

## アグロフォレストリーではなんと

### 雨で被害が・・・

アグロフォレストリーのメンバーも、今年の雨続きの天候に悩まされ続けています。せっかく植えたピーナツ、大豆も、肥料流出の被害にあってる箇所が見受けられます。ひまわりは今のところ無事なようですが、花が咲いた後も雨が続くと種が腐り始めるので心配です。こちらはチベンビ農業学校のクムウェンダ氏と各地のモニターたちが、メンバーの畑の状況を見守り、逐次アドバイスを行っています。しかし、いかんせん雨が激しく、場所によっては半分水没し、水が引くまで畑に近づけない所もあります。私も自分の目で畑を見たかったのですが、2月の途中からは、道路状況の悪化から村へ入れなくなってしまいました。

## 小学生でもできるんじょ! 空缶集めて国際協力

このたび吉野川市立森山小学校(徳島県)の児童会6年生が中心になり全校の生徒の皆さんとの協力によって集められた空き缶「71,908」個により、50,000円の寄付がTICOに寄せられました。目標の7万個を大きく上回る成果に児童会は大喜びとなりました。学校側が企画してくださった贈呈式では、児童会から空き缶集めの活動と成果の報告会が全校生徒の前で行われ、その堂々とした発表には感激しました。森山小学校とTICOの繋がりは5年前。講演に招待いただきアフリカの話をしたのがきっかけとなりました。それから毎年、空き缶集めで得た収入を全額TICOの活動支援に寄付していただいている。これまでにも、TICOの活動を通して、手押しポンプや学校建設の資金の一部としてザンビアの人々の生活向上のために支援されてきました。今回いただいた寄付は、ザンビアの小学校へ机や椅子を送る支援に使わせていただきます。



また、6年生の皆さんには、特別授業を実施させていただき「アフリカ版人生ゲーム」を通してアフリカの厳しい現状を深く理解していただきました。人生ゲームを通して学んだことを感想文にまとめてくださったので一部紹介いたします。

「人生ゲームは楽しかったけど大切なことを気づかせてくれました。人が産まれるというのは奇跡に近いことです。」「日本は日本だけで成り立っているのではなく、世界の国々と深く関わっていることがわかり、ザンビアの人たちのように厳しい生活を強いられている人たちがいるのだから、自分の身の回りのことだけでなく、世界の人たちに目を向けて行動していこうと思いました。」「産まれてからすぐに何も悪くない人々の尊い命がこんなにも簡単に奪われるなんてあまりにも不幸平過ぎるとおもいました。」「ザンビアの人たちが毎日笑顔でいられるのなら、私も生きていらることに感謝をしながら1日を大切に過ごしたいです。」

森山小学校の皆さん、本当にありがとうございました!!

## アフリカ版人生ゲームとは・・・

ザンビアでの経験を元にアフリカで生きることの意味を体験できるカードゲームで、TICOが開発、作成したものです。TICOではこのように、途上国の現状や世界規模の課題について体験を通して理解ができるよう(地球市民教育や国際理解教育という言い方をします)、参加型教材の開発を行っています。試行錯誤を繰り返し、現在は教材の汎用化を目指しています。人生ゲームだけでなくTICOオリジナルの教材開発も行って行きます。またこの事業はJICS(財団法人・日本国際協力システム) NGO支援事業の助成を得ています。



教材作成真っ最中の渡部あかりさん

TICOでは、学校の総合学習の時間などでの国際理解教育、開発教育の講師派遣をおこなっています。また、学校だけでなく、地域、職場などで、国際理解を深める活動をしてみたい、とお考えの皆様、TICO事務局がお手伝いをいたします。ぜひご相談ください。連絡先:TICO事務局(担当・五十嵐久美子)TEL:090-7786-3193 FAX:0883-42-5527 メールアドレス:zikomo@nmt.ne.jp

# TICOの経験を次世代へ繋ぐ・・・人材育成事業報告

TICOでは、これまでの貴重なザンビアでの国際協力の経験をもとに、次世代を担う人たちが「地球市民」として成長できるようさまざまな事業に取り組んでいます。特に最近は日本全国から大学生が徳島に集まっています。都会では経験できない自然とのふれあいの中で、世界のどこにいても「地域循環型社会」を作ることの重要性を学ぶ機会となっています。

## TICOが人を「地球人」と呼ぶ訳がわかった！

徳島大学医学部看護学科4年 穂木山 藍  
TICOユースの一員となり、日に日にアフリカの存在が自分の中で大きくなっていました。今まで未だの世界だったAfricaだが、決して無関係ではないと思えてきた。「TICOの海外での活動をこの目で見たアフリカの現状を身体で感じたい。そして日本の現状もまた改めて考えなおしたい。」そんな想いよりアフリカに滞在することを決意した。

そこで出会ったのが、IFMSA（国際医学生連盟）のAfrica Village Project。Africa Village Projectの他メンバーは、同じ学生とは思えないほど強い意志・多くの体験・多大な知識を身に付けておられた。一人一人から学んだことは本当に数しれない。Zambiaでは、数々の出会いがあり、そして多くのことを学んだ。目で見て、耳で聴いて、手で触って、身体全体でアフリカを感じた。壮大な大地・空・自然・・・・。その裏側に教育・栄養・死亡率・寿命・収入などの多くの問題が潜んでいた。実際に調査より、乳児死亡率・妊産婦死亡率の高さは明らかであった。中には、ヘルスセンターや病院が遠すぎて、辿り着くまでに胎児を死に至らしてしまうケースもみられた。また、病院での医療者不足・医療技術の遅れ・医療器具不十分といった問題もみられた。手は石鹼で洗うべき、水は煮沸してから飲んだほうが良い、緑黄色野菜は摂取したほうが良いなど、指導すべきことはたくさんあったが、石鹼はどの家にもあるのか、緑黄色野菜はとることができなのか、蚊帳はお金がなくて買えない家族もいるのではと、指導項目を



村のマミーたち

あげるにつれ、疑問が自分で増していく。トイレを作るにせよ、救急車を贈るにせよ、単なる調査結果や現地の様子などの詳細は、地球人力レッジ give and takeではいけ

村人にインタビューをする様子



ないと感じた。何事も結局は、現地の人々自らの手で継続させなければならぬ。手を食事前・トイレ後などきちんと洗いきれない布でふくことを指導しても、自身の意欲がないと、その指導は無意味なものとなる。国際協力は、私たちが知識やものをただ単に与えていくだけのことではないと強く感じた。

すなわち、国際協力において大切なことは、何よりも「信頼関係」ではないかと自身の中で結論に達した。ザンビアに来て驚いたことの一つとして、部屋の二重の鍵。盗難・詐欺が多く、信用したいが信用し難い現状があるがために信頼関係を築き上げることは難しい。信じないことより信じることのほうが怖い、難しいといった現状はとても悲しいものだ。しかし、信頼しあわなければ、何事も進まない。JICAもTICOもザンビアでの活動は、一（いち）からのものだった。時間はかかるかもしれないが、きっとこの一からの行いこそが希望の光を導くものであると私は強く思う。今回のプロジェクトは、多くの人が信頼関係を築きあつた結果、円滑に進むことができた。TICOの方々、現地の方々、田淵先生Familyなど本当に多くの方々のご支援あってのものだ。メンバーにも多くの面で助けられた。隣人が困っていれば手を貸して、自分が困っていれば手を借りて、その助け合いが互いを高めあう。すなわち、国と国が助け合えば、地球全体は+に向かう。TICOが「人」を「地球人」と呼ぶ訳。それは、私たちは、単なる「人」（日本人・ザンビア人・・・）ではなく、皆「同じ地球に住む人」であることを強調するためであることを改め知った。

## 村人の財産である家畜を守るために・・・

牛の薬浴槽は、雨期には乾期よりも利用数が上がります。理由は、雨が降ると家畜が病気になりやすいと信じている農民が多いから。確かにそのとおりですが本当は雨期でも乾期でも、継続的な薬浴をすることが大切です。薬浴槽の維持費を農民からの利用料で捻出している管理委員会のメンバーたちは、なんとか地域農民の継続的な利用を促したいと思っていますが、まだまだ利用数は低いのが現状です。薬浴の大切さはわかっていても、お金がなくて使えない人。薬浴の効果を信じていない人。それどころか、牛を薬浴させると病気になるという迷信もあるそうで、牛を薬浴に全く連れてこない農民も多くいるとか。こういった農民に対する意識啓発のために、政府役人の獣医師が定期的に情報提供をしていますが、まだまだ意識の改革までには至っていません。最近では、村の首長をまきこんで薬浴を義務化する方向で動いているようです。数年前には口蹄疫の蔓延で、チベニ地域の家畜の多くが死んでしまっています。一旦無くした家畜を再度手に入れることは、農民たちにはとても難しいことです。後に、数年前の伝染病蔓延時に家畜が全滅し、それ以来家畜を持たない農民がこの地域にたくさんいます。家畜を無くした農民たちの生活は、以前にも増して貧困になります。それを考えると、強制的な薬浴の義務化には不安要素ももちろんありますが、役人たちの言い分も理解できることではありません。

チルクトゥの薬浴槽は、TICOが支援した薬浴槽の中でもっとも成功している薬浴槽です。利用数も、管理費をカバーできるだけの数が継続的に維持されています。管理委員会のメンバーも積極的に活動しています。管理委員たちは農民たちが牛を薬浴に連れてくる金曜の午後、1時頃から4時頃まで、薬浴槽の前で農民を待ち続けます。自分たちの牛も薬浴させるとはいえ、毎週金曜の午後を薬浴槽の運営のために割くメンバーたちは、皆ボランティアです。

カノンゴの薬浴槽は、利用者数の低迷に悩まされて

います。維持費は今のところかろうじて捻出できていますが、もし浴槽にヒビなどが入り、修理しなくてはいけなくなったとき、資金不足になる危険性があります。政府から派遣されている獣医師のテンボ氏は、利用者に対する意識啓発のワークショップをしようと一年前から言い続けていますが、毎回直前に別の用事が入ったとのことでキャンセルされ続けています。役人としていろいろ仕事があるようですが、このワークショップは彼ら専門の獣医師にしてもらおうしかないのです。

養豚グループでは、豚舎の管理的確にこなし、一匹の子豚木陰で牛が来るのを待つチルクトゥグループがヘルニアで死

亡した他は全て元気に成長しています。5月には子豚たちを販売するので、メンバーたちはあと一息と張り切っています。地元の農民たちも養豚に興味を示しており、5月には何匹かの豚たちが地元農民に販売される予定です。養豚は利益が大きいですが、管理が非常に難しいため、農民たちはグループを組み、共同で世話をするつもりのようです。

牛や豚などの家畜は、小規模農民にとって貴重な財産です。ザンビアの農民たちはほとんどは、天水頼みの農業をするため、5月から11月の乾期の間は農業ができません。雨期に充分な作物が収穫できるとは限らず、食べ物の貯蓄が底をつくこともしばしばです。そんな彼らにとって、家畜は困ったときに現金に替えられる貴重な財産です。TICOが支援した牛の薬浴槽や養豚プロジェクトが、チベニ農民たちの生活力向上の一助となればと期待しています。



子豚たちもスクスクと育っています。

# ルサカの首都を守る救急救助プロジェクト通信

TICO事務局 五十嵐 仁

## 交通事故は途上国における死因の第4位！

「救急医療など発展途上国ではまだ必要ではない。マラリア、HIV、急性呼吸器感染症、下痢症の対策の方がもっと優先されないといけない。」という声を私たちTICOも良く援助界の世論として聞きます。そこまで言われると、時々そうなのかな？と弱気になってしまいますが、救急救助隊整備プロジェクトがどう発展途上国の人々の健康と福祉の向上に貢献しているか少しだけおさらいしたいと思います。

救急救助隊プロジェクトは、最先端の救急医療技術を伝授する活動ではなく、基本的に貧困などに苦しむ一般の交通機関を利用するだけの経済的な余裕が無い人々で、歩行が困難なぐらいい健康を害した人に対し、昼夜問わず保健医療サービスに迅速にアクセスする一助となる人間の安全保障を重んじた公共的な仕組みとTICOでは考えています。日本では、全国ほどからでも119番をダイヤルすればプロの資格を持つ消防職員の方々（救急隊）が迅速に助けにかけつけてくれるシステムです。しかし、発展途上国のほとんどの国々ではこのような人々の命を守る仕組みが整備されていません。先進国ではこのような仕組みは当たり前のように思われがちですが、発展途上国では緊急時助けを求める場所がほとんど無いのが実情なのです。

もう一つ、救急救助システムの重要性を説きます。それは、交通事故です。WHOによると1990年のDALYs（世界の疾病負担）は、交通事故などの外傷で健康的な生活が失われる時間は第9位でした。ところが、2020年の予測では、上に書いた感染症などを飛び越えて第3位に浮上すると言っています。つまり、発展途上国でも交通事故は今後大きな社会問題となり、人々の健康を害する主因となります。多くの発展途上国では既に交通事故などの外傷による死亡が國



の死因のトップ5に入ってきており、国も増えてきています。ザンビアでは2005年のデータを見ると既に死因が第4位に浮上してきました。交通事故で怪我をした人々が効率的かつ安静に応急処置を受けながら搬送される機会を与えるのが救急搬送システムです。

救急搬送システムは、今もそしてこれからも発展途上国でも必要な仕組みで、自家用車などを持たず、また夜間治安の関係からタクシーも来てくれない貧困地区に住む人たちにとっては、唯一のライフラインなのです。こんな状況を理解したTICOでは幸い救急行政の専門家がいました。そして、ザンビアでは近隣諸国のモデルになる可能性を秘めた救急救助隊の整備が行われています。持続性を高揚するための課題はまだまだあります。同活動に参加する現地の有志は24時間365日要請があれば出動をする体制を取っています。

## ザンビア至上初、大規模災害総合訓練実施

さて今号では、TICOと共に発展途上国に救急救助の特殊技術を伝授する謂わば救命技術の伝道師であるJPR（日本国際救急救助技術支援会：神戸）がザンビアで大規模交通災害に対応するための総合訓練を昨年11月に実施しましたので、紹介します。

ザンビアではHIV感染拡大と同じように、交通事故による怪我、死亡、そして社会復帰の困難など人々の健康を害する新たな危機が到来しています。ザンビアではTICOとJPRが救急救助隊を整備するまでは、首都でさえも交通事故で発生した怪我人はトラックの荷台を使って素人搬送が行われていました。当然、今でも救急車を待たずにそのような方法で怪我人を病院へ搬送することは続いているが、救急車を要請して訓練を受けた救急隊員に任せようとする習慣が付いてきたことは事実です（2005年の救急車出場回数は3700件強でした。）。

そのような中、一度に50名から100名の怪我人を出す大型バスが関与した交通事故もルサカ郊外そして地方の国道では頻繁に発生しています。国も大きな社会問題として認識し、運輸省の大蔵が国会の答弁で交通事故はザンビアの社会問題であると名言までしました。

多数の怪我人が発生した場合、通常の体制では当然ながら対応することが困難です。しかし、現在ルサカにある緊急車両と装備を有効活用しつつ複数の関係機関の連携を瞬時にに行うことができなければ、大規模交

## ンゴンベコミュニティセンターで学校建設大詰め！

TICOザンビア事務所  
西口三千恵



和太鼓奏者のヒダノ修一さんとカソリック大船教会のご支援により、ンゴンベ・コミュニティセンターに新たな教室建設が始まりました。

保育園から始まったセンターの教育活動ですが、子どもたちの成長にあわせて教室の数が少なくなっていました。今年はついに5年生になる生徒が出てきたのですが、すでに教室は満杯状態。雑貨販売をしていた小部屋まで臨時教室に使っていた状態でした。ヒダノさんに校舎拡張工事へのご支援をお願いしたところご快諾頂き、大船教会でのコンサートを通じ120万円を超えるご寄付を頂きました。



ザンビアは驚くほど物価の高い国です。これは、ほとんどのものを輸入に頼っていることも一因ですが、時には国内生産されているものも急激に高くなります。今回も、年末から工事が始まりましたが、途中でセメントの値段が高騰。同時に正規店からセメントが姿を消す事態となりました。セメントはザンビアで生産されているのですが、セメント会社が生産を一時停止したことが原因といわれています。

そのような緊急事態の中、TICOとンゴンベのスタッフが協力し、資材の確保に奔走しました。その甲斐あって、二月末にはひとつ目の教室が完成しました。

建設をお願いした大工さんもンゴンベ地区の住んで、地域のための学校づくりとあって、いかに安いコストで丈夫な教室を作るかに頭を悩ませてくれました。また、ンゴンベ地区内にあるブロック販売業者も、通常販売価格より安くブロックを販売してくれました。ンゴンベ地区で支援をはじめて十年。コミュニティセンターが地域の人たちに受け入れられていることを実感しました。

教室の建設が始まることで、地域からはさらに多

くの子どもが入学手続きに訪れています。金銭的問題から公立学校に入れない子どもたちを格安価格で受け入れているコミュニティスクールに対する需要は大きく、代表のクムウェンダさんも今回の新教室建設に大いに張り切っています。また、少しでも費用をおさえようと、建設で出た廃材を使い、自主的に机を作り始めました。もらえるものは何でももらっちゃおうという人が多い中、こうして少しでも経費をおさえようという彼女たちの取り組みを嬉しく思います。

子どもたちも新しい教室で勉強できることがとても嬉しいらしく、毎日元気に学校に来ています。ベンキ

塗りを自分たちでしたことで、「自分たちの教室」という気持ちが強まったようで、掃除や片づけも率先して行っています。ゴミはゴミ箱へという概念が浸透しており、道を歩きながらポイポイゴミを捨てる人が多いザンビアではとても貴重な光景だと思います。そんな高学年の子どもたちを見て、保育園の小さな子どもたちも見よう見まねで教室を掃除したりしています。子どもたちの間にも教室を大切に思う気持ちがいっそう強まっていると感じました。



現在、ヒダノさんと大船教会の皆様からの寄付に加え、カリタス女子中学高等学校の生徒の皆さんからの寄付を使って第二・第三教室も建設中です。ご支援頂いた皆さん、本当にありがとうございます。



救助隊は、小型自動車に閉じ込められている怪我人の救出を油圧機材の活用で試みます。別のバスからは、重症の怪我人が救急隊員や消防隊員によってトリアージポストへと搬送されてきます。そして、看護師や到着した医師がトリアージを行っていきます。赤、黄色、緑と区分けがされていきます。赤に分類された怪我人は現場で応急処置がされつつも、次々に優先的に救急隊によって大学病院、軍病院へと搬送が始まりました。

上空には災害現場の状況を把握するとともに、重症患



者の搬送を行うために空軍のヘリが飛んでいます。正に災害の現場の様相があります。この総合訓練は47分で全ての搬送を必要とする怪我人が現場から医療機関へ搬

送され、現場指揮官によって怪我人の数、搬送先病院名、搬送された怪我人の数、死者の数などの統計が瞬時にまとめられました。そして来賓として来ていた副大統領府副大臣や日本国大使館領事へ結果報告が行われ、訓練終了が告げられました。

47分の短い時間でしたが、のものすごい動きでした。ザンビアの人々もさまざまな課題を持ちつつも協力して専念すればここまでできるのだ！を感じたようです。災害時、12の省庁が躊躇なく連携すれば人の命を発展途上国の財政が厳しい政府でも沢山救うことが可能であることを示唆した訓練となつたのです。

総合訓練の参加総数は、211名。12の関係省庁団体が参加し、TICOからはロジスティック要員を2名、JPRは指導員を16名派遣しザンビアで初の大規模災害に対応するための総合演習は無事終了しました。風のようにルサカに到着したJPRチームはまた風のように日本へ帰国して行きました。訓練を終えた後、修了書を手にする演習参加者の顔には充実感に溢れていたのは確かです。連携がどれだけの力を發揮するのか私たちも学ぶことができた大規模な活動でした。今後も徳島で研修を終えて帰国した警察官のカチョファさんも加わり、さらに救える命をもっともっと救っていただきたいと期待しています。



\*\*\*\*\*  
次回は、アフリカの経験をアジアにて活かすため、カンボジアで実施した事前調査について詳しく報告します。TICOは、これからも人々の命を守る仕組みを発展途上国に作っていくために、協力し合える団体と連携してその国に見合った救急搬送システムを構築していきます。是非応援をお願いします。

交通事故の現場で人々は息絶えることになります。よって、ザンビアでは歴史始まって以来の大規模災害に対応するための訓練をJPRが実施しました。日本の消防官有志が集まるこの団体は、相手国の国情に合わせ日本で培われてきた救命や救助の技術を伝授する専門団体で、今回は訓練規模の大きさから16名のメンバーが派遣されました。皆さん有給休暇を使い自費で渡航する完全なる無償の奉仕活動です。

TICOでは、JPRチームの到着する2週間前に救急行政と公衆衛生の専門職員を事前派遣し、訓練が広域応援協定に基づく多数の関係省庁と団体を巻き込むことから、ザンビア副大統領府危機管理局（副局長がJICAの研修で神戸に以前滞在経験あり）と調整を行うことで準備に入りました。チーム受入体制、宿舎の確保、訓練場所の設定、訓練機材の準備、各関係省庁・軍などとの調整、訓練生の参加基準の作成と応募など体制作りを行いました。

2006年11月20日にJPRチームはルサカ国際空港に到着、副大統領府、警察庁、ルサカ市消防本部、地域警察救急救助隊、ボランティア救急隊、空港消防隊などが滑走路でチームを迎えるなどザンビア国政府側もかなりの力の入れようです。

チームは到着直後から休む間もなく、訓練のための機材の選定やカリキュラムの確認作業など夜中まで時差ぼけの中準備を進めました。指導チームはA：救急医療、B：救急隊員のための救急法、C班：救助技術の3つに分かれ、各班おおよそ20～25名の訓練受講者を12の省庁、軍、そして国連から招待し3日間の短期集中型訓練を実施しました。

会場は、ルサカ国際空港に隣接する航空管制官要請学校の教室を借り上げて、午前、午後とフルに実施しました。A班には、軍医や大学病院（UTH）などの救急医なども参加し、日本の医師、看護師そして救急救命士より高度な救命手技の伝授をうけました。B班は、救急隊員として現場での応急処置法や災害現場でのトリアージのコンセプトを含め現場における隊員としての動きについてロールプレイなども取り入れながら指導が実施されました。C班では、ザンビア初の救助工作車（兵庫県寄贈）を使用し、救急救命活動の前に救助活動があるという理由から、国連の専門官も含め工作車に搭載された各種機材の取扱方法、事故車に閉じ込められた怪我人の救助手法、現場での安全管理について指導を受けました。

訓練の最終日には、翌日開催される大規模災害模擬訓練（100名の怪我人を想定）のためのトリアージ方

法について合同研修を実施しました。

さて、大規模災害模擬訓練は11月24日に実施されました。関係する12省庁（軍も含む）から可能な範囲で訓練現場の設定に寄与していただくこととなり、大型バス2台、既に破損している小型自動車2台、来賓用テント、空軍のヘリコプター、ルサカ市内にある緊急車、怪我人の役をする100名の人員などを準備しました。JPRの指揮の下、リハーサルが実施されよいよ訓練本番です。JPRの各16名のメンバーは指導を行った各チームがスムーズに動けるように、入念な事前指導を繰り返しアドバイスしていました。

11月24日午後14時05分、破損している模擬事故車両に火が入り、車両火災が作られて、総合訓練が開始されました。一般市民の役を演じた開拓軍のメンバーが警察へ通報し、県警司令室はまず交通警察官を現場へ急行させます。現場に到着した警察官はバス2台が正面衝突した状況とそれに巻き添えとなった小型自動車の1台から炎上、1台はバスのドアを塞ぐ形で運転手が車内に閉じ込められている情報をさらに司令室へ報告します。正に本物に近い交通事故の現場が再現されました。



県警司令室は交通警察官から救急隊や警察官の増強依頼を受け、事故現場から直近の救急隊、消防隊を派遣します。現場へ到着した消防隊は延焼している車両の消火作業を始め、同時に到着した救急隊員は事故の状況を把握、無線でさらに災害応援出動を要請するなど訓練の通りの活動が行われています。災害出動の要請を受けた副大統領府危機管理局はさらに医療チームなどを率いる広域応援救急隊を率いて指揮隊が現場に入ります。現場では、指揮隊が現場本部を設置、応援救急隊はトリアージポストと応急処置エリアを設置していきます。先着の救急隊員が歩行可能な怪我人などを緑のポストへ移動させていきます。